

氏名：岡野 要

題目：ヴォイヴォディナ・ルシン語の移動動詞の研究

——語彙体系の記述と言語接触による変化を中心に——

(論文内容の要旨)

本研究は、セルビア北部およびクロアチア東部の一部の自治体で話されるスラヴ系のミクロ文章語であるヴォイヴォディナ・ルシン語(ルシン語ヴォイヴォディナ変種)における移動を表す動詞の語彙体系を共時的に考察したものである。ヴォイヴォディナのルシン語は、ルシン語の中で最も早く文章語化され、今日セルビア共和国ヴォイヴォディナ自治州では、セルビア語、クロアチア語、ハンガリー語、スロヴァキア語、ルーマニア語とならび、地域公用語のひとつになっている。この言語の語彙の研究は、これまでルシン語を母語とする研究者によって行われてきたが、ルシン語における外来語の研究や標準語化・文章語化に伴う各分野の用語整理がその大部分を占め、ルシン語の基本的な語彙の研究、とりわけ動詞を対象とした研究はほとんどなかった。本研究では、人間にとって基本的な概念のひとつである〈移動〉を取り上げ、ルシン語の移動を表す動詞の語彙体系がどのように組織され、この概念および下位にある諸意味領域がどのように語彙化されるかを分析した。

導入では、本研究の概要を示し、本研究が行われる背景をルシン語研究・スラヴ語研究そして言語研究一般から説明し、本研究における方法論と目的を示した。

序章では、ルシン人とルシン語に関する一般的な情報を提示し、ルシン語における複数の文章語変種の存在について、さらに本稿で考察の対象としたルシン語(ヴォイヴォディナ変種)についてその成立過程を簡単にまとめた。また、ヴォイヴォディナへのルシン人の移住とその後のコミュニティの形成、移住先でのルシン語の保持および地域公用語としての需要の高まりとその後の本格的な標準語化(文章語化)のプロセスについても触れ、序章の最後では、ルシン語の文法構造の概略を示した。

第1部では、主にルシン語の移動動詞の語彙体系について記述的な観点から分析した。

第1章では、ルシン語研究において語彙がどのように研究されてきたかについて概観した。ルシン語における語彙の研究は、支配言語や周辺言語との接触で外来語が流入していた状況とそれに対する危機感が契機となっていることを指摘し、このような背景から外来語研究が語彙研究の中心的なテーマであったことを示した。辞書学的な成果については、標準語化とともに数々の辞書が編纂されてきたが、ルシン語の語彙をルシン語で説明した辞書は2017年末に刊行された『ルシン民衆語辞典(全2巻)』までなく、この辞書の記述をもってしても、同義語間の意味の細やかな違いなどが十分に記述されていないことを指摘した。加えて、ルシン語の移動動詞は、これまで語彙論的研究でも、ルシン語研究のほかの分野でも取り上げられることはなく、文法書における記述や、教本における記述および接頭辞研究の中で言及された程度であり、個々の語彙の意味を記述したものはないことについても述べた。

第2章では、〈移動〉の概念がどのように概念化され、またその際にどのような要素が重要となるかについて述べた。本稿では、〈移動〉の意味野を10の意味領域に分け、その中の〈歩行での移動〉、〈乗り物での移動〉、〈速度を伴う移動〉、〈困難を伴う移動〉、〈水環境における移動〉、〈空中での移動〉を基本的な移動とし、残る〈跳躍〉、〈回転〉、〈振動〉、〈落下〉のように明確な位置変化が見えにくい移動を周辺的な移動として、それぞれの意味領域がどのように下位分類され、その際にどのような意味パラメータが関与するかを簡潔に述べた。

第3章では、ルシン語の約80の移動動詞を第2章で分類した意味領域ごとに分析し、それぞれの意味領域がどのように語彙化されるかを示した。分析では、それぞれの意味領域は数個～15前後の語彙単位によって語彙化され、それぞれの語彙が独自の意味を切り取っていることを示し、語彙体系が、複雑ではあるものの一定の体系性をもって組織されていること、語彙化の際に類型論的な研究で提示されてきた意味パラメータが対立を作り出すことで、語彙の選択にも影響を与えていることが明らかになった。それぞれの意味領域において関与する意味パラメータは異なっており、これらのパラメータが複雑に絡み合うことでフレームが形成され、これが語彙体系のあり方に反映されていることが示された。

加えて、ルシン語の移動動詞には借用語が少ないこと、その中でも現代語でアクティブに使用されている語は *unačupau* (*ue*) / *uejtau* (*ue*) {špacirac (še) / šejtac (še)} 「散歩する」と *vožnu* *ue* {vožic še} 「乗り物で行く」だけであることを指摘した。また、語単位ではなく、意味や用法単位で借用が行われた、いわゆる「見えない」借用の存在についても指摘した。例えば、動詞 *pyšau* *ue* {rušac še} がセルビア語の訳語である動詞 *kretati* 「動く」が意味の拡張モデルを借用し、同じように「出発する」の意味でも用いられることを示した。

第4章では、ルシン語の移動動詞の中でも、水中の移動を表わす動詞を取り上げ、これらの動詞の語源と現代語における意味の関係を、ほかの現代スラヴ諸語と比較しながら示した。ルシン語は、ほかのスラヴ語と同様に、共通スラヴ語から継承した語彙を保持しているが、それぞれの語彙の意味変化の過程は、スラヴ語全体で部分的に共通しながらも、個々の現代スラヴ語において異なっている。ルシン語の水中の移動を表わす動詞も、ほかのスラヴ語と共通する意味変化のパターンを持ちながらも、細かい部分ではほかの親縁言語と異なることも多く、同根語であっても、ほかのスラヴ語と意味が異なることを指摘した。

第2部では、ルシン語のいわゆる「運動の動詞」カテゴリーの分析を行った。

第5章では、定動詞と不定動詞の区別をもつ「運動の動詞」カテゴリーがルシン語にも存在することを確認し、このカテゴリーがどの程度の安定性を持つかを記述・分析した。ルシン語において、定動詞は一方向へ向かう一回の移動を表わすために用いられ、一方、不定動詞は、定動詞と同じ統語構造を取る際に一方向へ向かう習慣的に繰り返される移動を表わし、そのほかの統語構造では、不定方向への移動や多方向への移動、そして移動の能力を指す際に用いられることを示した。また、ルシン語の不定動詞が、過去時制で「行ってきた」のように往復の移動を表わす際には用いることができず、この意味を表わすには *be* 動詞の

過去形が用いられることを指摘し、この点ではポーランド語やチェコ語、スロヴァキア語と同じ西スラヴ語タイプに分類されることを明らかにした。

第6章では、第5章での分析を土台に、不定動詞が用いられるべきであると思われる場合に定動詞が用いられる、「非規範的」用法について考察を行った。このような混同がみられるのは *исц-ходзиц* {isc-xodzic} 「行く；歩く」、*бежац-бегац* {bežac-behac} 「走る」と *лециц-летац* {ljecic-ljetac} 「飛ぶ」の3組であり、混同の原因となっているのが、ルシン語の文章語における規範の欠如と国家公用語であるセルビア語・クロアチア語における形態的・意味的に類似した動詞の存在という2つの要因が密接に関わっていることを指摘した。このような混同はここ数十年の間に見られるようになったもので、まだ「運動の動詞」カテゴリーそのものへ直接的な影響があるとは考えられないが、動詞 *лециц-летац* {ljecic-ljetac} 「飛ぶ」については、20世紀中ごろまでには定と不定の相関関係が希薄になり、20世紀後半には不定動詞 *летац* {ljetac} を用いず、定動詞の *лециц* {ljecic} のみで飛行のすべての意味を表わす話者が増え始めたことについても指摘した。

また、*бежац-бегац* {bežac-behac} 「走る」と *лециц-летац* {ljecic-ljetac} 「飛ぶ」については、これらの動詞から派生した動名詞が使用される場合にも定と不定の混同がみられ、本来、不定動詞から形成されるはずの動名詞が、定動詞から形成されることを実例とともに示した。動詞 *бежац-бегац* {bežac-behac} の場合、不定動詞から形成する動名詞動詞 *бежане* {behanje} 「走ること」が規範的であるにもかかわらず、定動詞から派生した形 *бежане* {bežanje} の同じ意味での使用が増えてきており、口語に近い報道文体では数が拮抗しており、一方 *лециц-летац* {ljecic-ljetac} の場合、不定動詞から派生した動名詞 *летане* {ljetanje} は用いられず、定動詞から派生した動名詞 *лецене* {ljecenje} 「飛ぶこと、飛行」が文学作品などすべてのジャンルで用いられていることを指摘した。

結論では、ルシン語の移動動詞の語彙体系が、複雑ながらも一定の体系性をもって組織されていることをまとめ、一部の動詞には、接触言語であるセルビア語からの意味拡張や用法の借用がみられ、借用語のように語という単位を伴わないレベルでも言語接触の影響がみられることを確認した。また、これまで研究されることのなかったルシン語の「運動の動詞」グループが、東西スラヴ諸語のように定動詞と不定動詞の対立を持ち、特に西スラヴ諸語に近いタイプに分類できることを確認した。加えて、長年にわたるセルビア語との接触により、「運動の動詞」には定と不定を区別しない動詞が出てきたり、本来であれば誤用と見なされかねない「非規範的な」用法が見られたりし、このカテゴリーが接触言語からの影響を受け、現在もなお変化の途中であることを指摘した。